

公用車に中古EV 実験

鳥取市が、中古の電気自動車（EV）を公用車としてリース契約で導入し、実用性を検証する事業を始めている。2027年7月末までの2年間で、連携協定を結んだ民間2社が協力。走行データやバッテリーの劣化具合などを調べ、本格導入に向けた課題を洗い出す。（西海直也）

鳥取市リース契約



実証に使われているEVの公用車（いずれも鳥取市で）

走行記録やバッテリー劣化調査

自動車リースを営む住友三井オートサービス（SMAAS、東京）、同社の販売代理店・智頭石油（智頭町）と締結した、中古EVの運用実証に関する連携協定に基づく取り組み。

導入されたのは、2019年登録の日産自動車「リーフ」1台で、SMAASが準備し、智頭石油がリースした。走行記録やバッテリーの残量といったデータを取得する専用の装置を設置。SMAASは市から提供されたデータを分析し、利



中古のEVの納車式に出席した（左から）下田支所長、田中社長、田中・常務執行役員

用した市職員らを対象にアンケートも実施し、課題があれば聞き出す。

市は23年4月、2030年度までに二酸化炭素（CO₂）排出量実質ゼロを目指す、環境省の「脱炭素先行地域」に指定された。再生可能エネルギーの地産地消に取り組んでいる、佐治町を中心とした地域で実施する。

佐治町総合支所での納車式には、市や2社の関係者が出席。支所の周辺を5分ほど試乗し、乗り心地を確認した。

SMAASの田中義人・常務執行役員は「CO₂の削減にとどまらず、バッテリーの耐久性を分析し、公用車としての実用性を検証したい」とし、智頭石油の田中康崇社長は「中古EVのより良い活用方法を見いだし、普及する一助になれば」と期待した。

下田俊介支所長は「佐治町は急な坂道があり、冬は雪が多く積もる。そうした厳しい環境にも中古EVが耐えるのか、実態把握に努めたい」と述べた。